

# 昭和 SP レコードで辿れば

政見レコード 〈その一〉

SPレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

先の衆議院選挙では、投票日直前までテレビやラジオで茶の間に政見放送が流れていた。物質的には豊かであっても、精神的に貧困なこの平和惚けした日本にあって、いかに日本人としての国民精神の復興を図るかとか、「個と公」の問題にどう取り組むかといった問題について、候補者のヴィジョンが打ち出され然るべきであると思うのだが、そのような政見放送は残念ながら一つもなかつたように見受けられた。

政見放送が実施されるのは、ラジオが昭和二十一年、テレビが昭和四十四年からであるから、戦前には政見放送というものは全く存在しなかつた。ところが、政見放送はなくとも、それに似

たものはあつた。いわゆる政見レコードである。

(二)

政見レコードの嚆矢は、大正四年三月の第十二回総選挙を前にして大隈重信首相によつて吹き込まれた「憲政に於ける輿論の勢力」と、後世憲政の神様として崇められた尾崎行雄司法大臣（中正会總裁）の「人類と禽獸」の二つである。これらのレコードは、吹き込み後すぐに製造され、それぞれ大隈伯後援会、中正会の立候補者に送られた。

大隈首相のレコードは大正四

年三月二日、日蓄の両面盤三枚に吹き込まれている（当時まだ片面盤が作られていた）。その内容を簡単に紹介する。

まず、「帝國議會は解散されま

した、今將に旬日の後に選挙が行はれて、今全國は選挙の競争が盛んに起つてゐる時であります、此時に方つて、憲政に於ける輿論の勢力を論ずるのは最も必要なりと信じますんであります。」との首相の発言ではじまる。大隈のレコードの方が尾崎のよりも一枚あたり十六錢六厘六毛高かつたことから、当時の東京朝日新聞は、「偉大と云ふのは、十六錢六厘六毛の事なのであるんである」と大隈首相の話し方を真似てからかっている。こうした記事が書けたのである。

続いて、大隈首相は、「この憲政の運用發達は、輿論に支配さるものであると云ふ事は、信じて疑はぬのである、輿論は凡て知識ある階級によるものである、茲に於て政治

家は、國民の指導者となつて國民を導く、輿論を導く、或る場合には、輿論を制すると云ふ力がなくてはならぬのである」と述べている。これは概ね現在の政治にも当てはまることがある。さらに、「帝國議會は發議の権を以て、法律を改正する事も、或は廢する事も、或は新たに法律を拵へることも、隨意に出来るのである、斯くの如き大なる権利を國民に授けられたものであるのである、然らば之れを平易に説き明せば、陛下は、明治大帝は、國民に大切な鍵を御渡しになつたと云ふて宜しいのである、（中略）國家の目的は、常に國運の隆盛、多數國民の福利を摂らす事に努めて居るのである、國家の意志は、國民の意志である、國民の意志の集合したものが、國家の意志である、國民の是なりと認むる事が、國是である、之れが多數政治の原則である、然れば國民の國家に對し、憲法に對する責任の大なる事は、恰も貴重なる陛下の賜はつた所の鍵を、大切に之を保

つと云ふ事が必要である」と述べている（以上は、「ニッポンノホン音譜文句全集」（大正十一  
年刊）より。写真参照）。

ここで現在生きている我々は、議会政治が当時も充分機能していたことを確認することができ  
る。また、大隈侯は、選挙権が「明治大帝によつて与えられた大切な鍵」であるとしているが、

現在の我々が選挙権をそのような厳肅なものとして受け止めてみるかどうか自問自答してみる  
価値があると言える。

### (三)

「諸君、今や普選第一回の総選挙が行われることになりました。政府は、反対党が国政を審議するの誠意なく、ただ内閣の更迭をはかるに汲々たるを認めましたゆえに、議会の解散を奏請したのであります。」

続いて、「(中略)、政府はもちろん、世界永久の平和を固むることに努力するとともに、国防のことを揺るがせにするものではない。しかし、世界各国間の形勢と帝国の現状とに省みて、内外政治の重点を殖産興業の上に置き、今なおを成績不振の産業貿易を盛んにして国家の繁栄、國民の福利を増進することは、誠に時代の精神、國民の生活に適応するゆえんであると信じるのです。」

田中は最後に「政府の主義、政策が良いか、反対党の態度が良いか、私は新選挙法による國民の投票が、必ず公正にして嚴格なる批判を与うることを期し

告ぐ」というレコードがある（写真参照）。それは、次のように文句ではじまる。

現在の我々が選挙権をそのように受け止めてみるかどうか自問自答してみる価値があると言える。

て疑わぬのであります。」と述べて締めくくつている（以上音盤からの筆者の聞き取りによる）。

この第一回普通選挙は、野党、特に無産政党に対する選挙干渉が行わたったことから否定的な評価も下せようが、野党の立憲民政党は、浜口雄幸同党總裁のレコードを作つて田中に対抗して、「普通投票に就て」を吹き込むことができた。

その後、田中内閣は、日本共産党的名前で君主制廃止を唱えるステッカーが張られたことを契機として、野坂参三、志賀義雄をはじめ無産政党関係者を大量に検挙した。いわゆる「三・

一五事件」である。このような無産政党に対する選挙干渉、三・一五の弾圧等があつたが、社会民衆党を含む無産政党から28名もの当選者が生まれ、また、社会民衆党党首の安部磯雄はなんと選挙直前に「無産政党の使命」というレコードを発売することができた。田中内閣を弁護したり、評価するつもりは全くないが、かつてのソ連や現在の中国において、無産政党ならぬ資本政党といつた「反対党」の存在が許された「であろうか。70年前の日本の方がまだ一党独裁体制のソ連や中国に比べて民主的であつたと言えないか。」

(続く)

